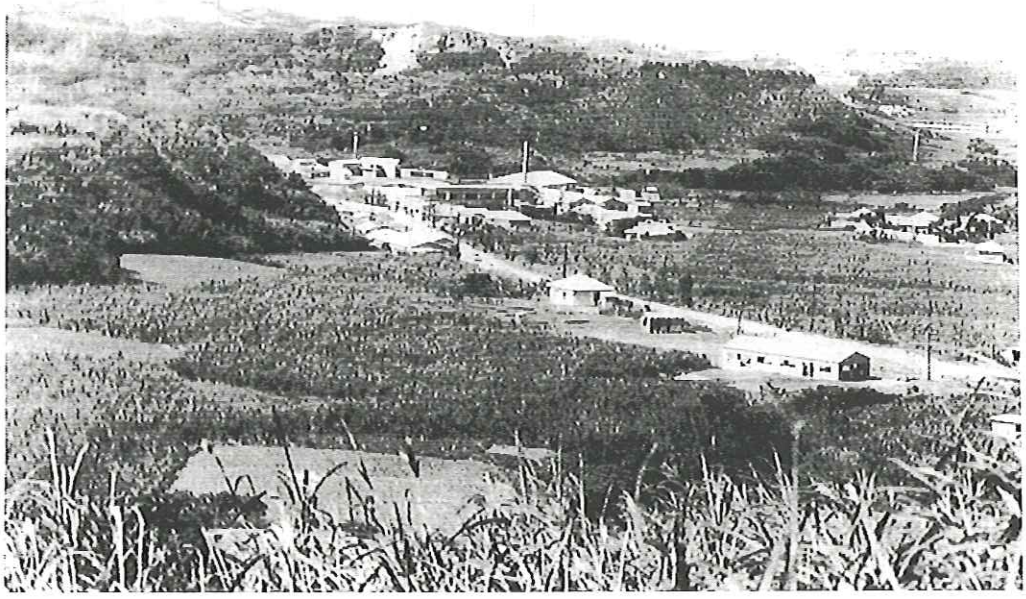
温故而知新可以為師　《論語　為政第二》

# 豊見城村史だより

第2号 1996・11・20

特集・豊見城村立中央図書館開館記念講座資料



嘉数バンタから豊見城グスクを望む　（1967年ごろ）

豊見城村教育委員会
村史編さん室

# 豊見城村史だより正誤表

| ページ | 上・下段・行 | 誤 | 正 |
|---|---|---|---|
| 二 | 一二 | 当間一郎 | 當間一郎 |
| 一八 | 全 | | 重複のため削除 |
| 二七 | 下　四 | やあやあ | やあ〳〵 |
| 四四 | 上　二 | 世章 | 盛章 |

# 豊見城村史だより第二号　目次

豊見城村立中央図書館　開館記念講座趣旨……1
開館記念講座　日程表……2
講師紹介　生田　滋　大東文化大学教授……3
「山南王国」と豊見城について……4
講師紹介　當間一郎　沖縄県立博物館長……9
組踊「未生之縁」について……10
「とみぐすく」の地名について……42
豊見城村史編纂業務日誌……45

豊見城村立中央図書館 開館記念講座

# 豊見城の歴史を掘る

◇ 講座開設の趣旨　村民待望の村立中央図書館が開館（平成８年３月１０日）したことを記念し、村民を対象にした図書館講座を４回シリーズで開催する。村内の身近かな歴史テーマにスポットライトを当て、改めて「豊見城の歴史の根っこを掘り起こそう」という立場で、第一線で研究活動をしておられる先生方を講師にお招きします。

◇ 運営方法　１００～２００人を単位にして講座形式で進められますが、会場によって収容人員に限度があります。そのため、各講座ごとに受講希望者を事前に受付し、定員に達し次第に締め切りとします。なお、受講できなかった人で、希望者には講座に関する資料を提供します（但し、部数に限りがあります）。

◇要　項

名　称　豊見城村立中央図書館 開館記念講座

主催者　豊見城村教育委員会

主　管　豊見城村立中央図書館

期　日　平成８年１１月２３日～平成９年２月１日（４回）

場　所　豊見城村立中央図書館（集会室）および村立中央公民館（中ホール）

テーマ　「豊見城の歴史を掘る」を統一テーマとし、別表のとおりテーマおよび講師を依頼する。

豊見城村立中央図書館 開館記念講座

# 日　程　表

第１回

テーマ　「山南王国」と豊見城について

講　師　生田　滋（いくた　しげる）　大東文化大学国際関係学部教授

（財）沖縄県公文書館　歴代宝案編集委員

日　時　平成８年１１月２３日（土曜日・勤労感謝の日）

午後２時～４時３０分

場　所　豊見城村立中央図書館　１階集会室　（収容人員 約１００名）

第２回

テーマ 組踊り「未生の縁」と豊見城について

講　師 当間一郎 沖縄県立博物館長 豊見城村史専門委員

日　時 平成８年１２月７日（土曜日）　午後２時～４時３０分

場　所 豊見城村立中央公民館 ２階中ホール　（収容人員 約３００名）

第３回

テーマ ジョン万次郎と豊見城

講　師 仲地哲夫 沖縄国際大学教授 豊見城村史専門委員

日　時 平成９年１月２５日（土曜日）　午後２時～４時３０分

場　所 豊見城村立中央公民館 ２階 中ホール （収容人員 約３００名）

第４回

テーマ 古文書・石碑が語る豊見城

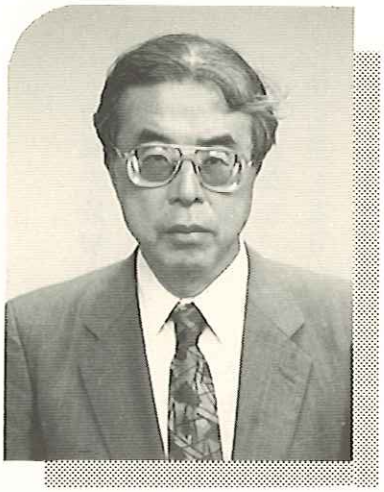
講　師 阿波根直孝 豊見城村文化財保護審議会委員 豊見城村史専門委員

日　時 平成９年２月１日（土曜日）　午後２時～４時３０分

場　所 豊見城村立中央図書館 １階集会室 （収容人員 約１００名）

◎受講申し込み先

901-02　豊見城村字伊良波３９２　豊見城村立中央図書館



# 『山南王国』と豊見城について

第１回講座　平成８年１１月２３日
豊見城村立中央図書館　集会室

## 講師紹介


生田（いくた）　滋（しげる）

大東文化大学国際関係学部
国際文化学科教授


出生地：旧満州国ハルビン市
生年月日：１９３５年１１月２日
最終学歴：東京大学大学院人文科学研究科修士課程（東洋史学専攻）
修了（１９６１年３月）

著　書：『ヴァスコ・ダ・ガマ－－東洋の扉を開く－－』（大航海者の世界Ⅱ）原書房、１９９２
訳　書：ヘンドリク・ハメル『朝鮮幽囚記』（東洋文庫１３２）平凡社１９６９
トメ・ピレス『東洋諸国記』（大航海時代叢書第Ⅰ期第６巻）岩波書店、１９６６（共訳）
ファン・フーンス他『オランダ東インド会社と東南アジア』（大航海時代叢書第Ⅱ期第１１巻）岩波書店、１９８８
M・N・ピアスン『ポルトガルとインド－－中世グジャラートの商人と支配者』（岩波現代選書９８）岩波書店、１９８４
論　文：（沖縄関係のみ）
「『おもろさうし』に見える王名について」『南島史学』１３(１９７９)１－２９ページ　「琉球国の『三山統一』」『東洋学報』６５－３・４(１９８４)３４１－３７２ページ
「対外関係からみた琉球古代史－南島稲作史理解のために－」渡部忠世・生田滋共編　『南島の稲作文化－与那国島を中心に－』（法政大学出版局、１９８６）９４－１２５ページ

# 山南王国と豊見城について

沖縄で最初に書かれた歴史書である『琉球國中山世鑑』（一六五〇）に、英祖王統の玉城王の時代に琉球国が中山、山南、山北の「三山」に分裂し、長いことたがいに抗争していたが、佐敷小按司尚巴志がまず山南王となり、ついで玉城王の死後、人々に推戴されて中山王となり、最後に山北王を滅ぼして琉球全土を統一したという記述がある。この「三山統一」はこれまで歴史的な事実とみなされ、その過程であるとか、その時期についての議論はあったが、「三山統一」そのものが事実であるかどうかということについて疑問を抱いた研究者はいなかったといってよい。しかし、私はこの問題について関係史料を検討した結果、「三山統一」そのものについて疑問を抱くようになった。ここではまず「三山統一」についての私の考えを述べ、それに基づいて「山南王国」と豊見城との関係を説明してみたい。

## 「三山」について

古琉球時代の歴史を考える際の根本史料は中国の明（一三六八ー一六四四）の宮廷の記録である『明実録』である。『明実録』のなかの琉球に関する記録を読んでみると、たしかに中山、山南、山北の「三王」が対立していたことを述べている記述がある。しかし朝鮮の李朝（一三九二ー一九一〇）の宮廷の記録である『李朝実録』の琉球関係の記事を読んでみると、少なくとも中山、山南の「二王」は一族ではないかと考えられる。

一方琉球から明に派遣された使節の名前を調べてみると、何人かの人物が別々の機会に中山王、山南王の使節として明に赴いていることがわかる。ただ残念ながら山北王に関する記事は少なく、しかも手がかりとなる記述がないので、山北王と中山、山南王との関係を明らかにすることはできない。

## 「三山」の明への朝貢

一三六八年に明朝をたてた洪武帝（一三六八ー九八）は海外貿易の利益を皇帝が独占する体制を作りあげようとした。彼はそのために民間の商船の海外渡航を禁止した。これを海禁令という。そして皇帝が各国の支配者を国王に任命し（これを冊封という）、その国王またはその使節が皇帝に敬意を表するために中国を訪れる際に（これを朝貢という）、かれらが乗ってくる船が運んでくる品物だけを民間商人が購入できるようにした。これを朝貢貿易という。日本史のほうでは勘合貿易と呼んでいる。

これでは明の国内はもとより、朝廷でも海外からの輸入物資が不足するので、洪武帝は各地に官営の貿易船隊を派遣して貿易を行わせた。また琉球との交渉の窓口である福州の商人は琉球を貿易基地とし、ここから日本や東南アジアに貿易船を派遣して貿易を行い、それによって入手した商品を琉球からの朝貢船という形をとって福州に運び込んでいたと考えられる。そしてこうした状況はおそらく一四三〇年代まで続いたものと考えられる。

琉球を基地とする中国人商人は「朝貢船」という名目でなければ、福州に渡航することはできない。かれらはこのために中山、山南、山北の「分立」を利用し、「中山王」、「山南王」、「山北王」の使節を乗せた朝貢船を仕立てて福州に渡航しようとしたものと考えられる。

**「三山」と琉球内部の状況**

十四世紀の末から十五世紀の初め頃の時期、琉球ではいわゆる「三山」のそれぞれの支配者が自分の領地を統一的に支配していたとは考えられない。おそらく琉球側で「按司」と呼ばれ、『明実録』に「結制」、「結致」などと呼ばれている人々はそれぞれの領地を支配する領主であったに違いない。

こうした数名、あるいは数十名の領主の間で擢でた勢力を持つ特定の領主が出現する契機となるのはなんであろうか。当時の琉球では中国から輸入される鉄器、鉄材、陶磁器などが生活必需品であった。従って特定の領主が支配者として台頭するためには中国、日本からの輸入品を独占し、それを「下賜」することが最も有効な手段であった違いない。

**琉球における貿易船の基地**

このように考えると、琉球において貿易船がどこに基地を持っていたかについて検討することが必要であることが明らかとなる。それを考える手がかりは一四七一年に朝鮮の李朝の申叔舟が著した。『海東諸国紀』に収められている琉球国の地図である。これにはいくつかの地名が記録されているが、そのなかに「・・城」つまり「グスク」がある。そのなかにも古いと思われる「グスク」と比較的新しいと思われる「グスク」がある。ごく僅かな例から結論を下すのは危険であるが、大まかにいって海上生活と関係のある「グスク」はまず沖縄本島の東側の海岸の断崖の上に作られ、やや時代が下ってから西側の海岸の船が停泊できるような川口から川を遡ったところにある断崖の上に作られるようになった、と思われる。おそらく後者のなかで最初に作られたのが浦添グスクであったと思われる。

ここで「浦添」と「島添大里」という地名に注目し

たい。「浦添」というのは「浦の支配者」という意味であり、「島添」というのは「島の支配者」という意味である。おそらくこの段階での琉球の基本的な構造は「浦」、つまり西海岸の川口に港と「島」つまり島の東側の地域との対立であったと考えられる。

こうした変化をもたらした原因は貿易に使用される船の大きさの変化であろう。島の東側に「グスク」の作られた時期に使用された船は、荒天の際には海岸に引き揚げておくことのできる程度の小型のものであったに違いない。しかし船が大型になり、海岸に引き揚げておくことができなくなると、船を安全に停泊させておくための泊地が必要となってくる。牧港はこうして使用されるようになった最初の港であったと思われる。

そして第三の段階が船の大きさが飛躍的に大きくなった時期である。それはいうまでもなく、明の海禁令によってこれまで日本や東南アジアに直航していた大型の船が琉球を基地として活動するようになった時期、つまり一三八二年以降の時期である。

## 「三山」の「位置」

沖縄本島の地図を眺めると、こうした大型船が停泊できる泊地としては三ヶ所しかない。それは国場川の川口（現在の那覇港）、安里川の川口（現在の泊港）、それに運天港である。

泊港から安里川を遡ると首里城のすぐ南に達する。また申叔舟の「琉球国図」を検討すると、安里川の支流の真嘉比川を遡って現在の龍潭に達する水路があったように思われる。私は龍樋は船の飲料水を供給するために重要であったと考えている。

那覇港から国場川を遡ると漫湖となり、そこに饒波川が注ぐところに豊見城がある。

運天港に最も近いグスクは今帰仁城である。しかし私は両者の間には関係がないと考えている。運天港の少し南に「首里原」という地名がある。現在はなにもないが、ここにグスクとはいわないまでも、集落があったのではないか。

こうした考えから私は首里城が中山王の居所であり、豊見城が山南王の居所であり、首里原が山北王の居所であったと考えている。申叔舟の「琉球国図」に見える「島尾城」は「島尻城」ではなく「豊見城」であると考えられる。

## 「三山」と那覇浮島

現在の久米、若狭、辻の地域は那覇浮島などと呼ばれ、小島であった。ここがいわゆる閩人三十六姓、つまり華僑とその子孫の居住地であった。おそらく明と琉球の交渉が始まった一三八二年よりも前から浮島が

華僑、およびその他の外国人の居留地であったと思われる。一方運天港のほうは日本との貿易港であったと思われる。おそらく一三八二年に初めて来航した明の使節はこの浮島に居留している華僑から島の状況を聴取し、首里城に住む支配者がかれらのパトロンであることを知って、彼に中山王という称号を与えたのであろう。そうすると、彼が明らかの輸入品を首里より北の各地の按司たちに分配する権利を握ることになったものと思われる。しかし彼は首里にいるので、国場川より南の地域の各地の按司たちに輸入品を分配する権利を握ることはむつかしかったに違いない。このために彼は一族の一人を豊見城に「山南王子」として配置し、その権利を握ったものと思われる。しかし首里城と豊見城とは交通が不便で、「山南王子」はややもすれば首里城の支配者に反抗し、浮島に住む華僑と結んで、明に使節を派遣するようになったのではないかと思われる。一方山北にも華僑の集落ができ、日本との貿易を背景として「山北王」を立てて、明に朝貢したのではないかと考えられる。これが「三山」分立の実情であったように思われる。

## 「三山」の「統一」

山北王の朝貢は一三八四年に始まり、一四〇五年に一端途絶し、その後一四一五年に一回あっただけで終わっている。山南王の朝貢は一三八〇年に始まり、一四一七年に一端途絶し、一四二四年から二十九年まで続いて終わっている。浮島の華僑はできるかぎり多くの船を福州に渡航させるために、「山南王」の名義をも利用していたものと思われる。

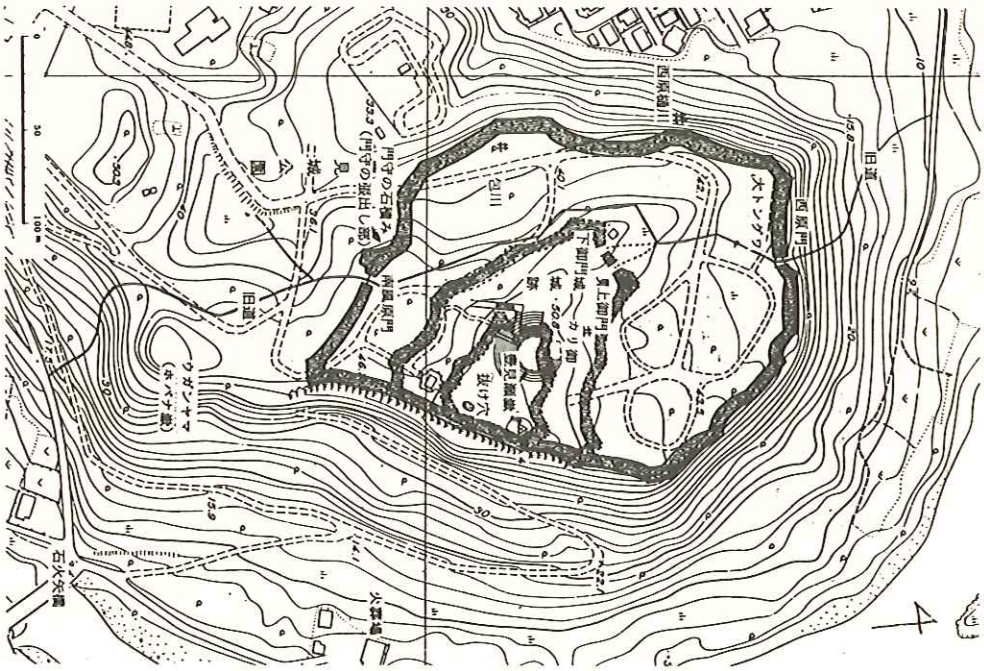
ここで注目したいのは一四一八年に「長史懐機」という人物が中山王の使節として朝貢していることである。彼は後に一四二八年に「安国山樹華木記」という碑を立て、そこで明の皇帝の徳を讃えている。彼は那覇に居留する華僑のなかでも特に重要人物であった。私はこの懐機がもう一人の長史である鄭義才とともに、福州で琉球との交渉を担当する市舶司からの命令を受けて、浮島に住む華僑集団を強力な統制のもとに置き、琉球からの朝貢を制限するように努力したのではないかと考えている。その一つの対策が中山王の使節と山南王の使節を事実上同一船団で派遣することにしたことであると思われる。この政策が効を奏したのと、密貿易の増加など、国際貿易の状況の変化によって、浮島に住む華僑にとって朝貢貿易の重要性が薄れ、山南王の名義による朝貢は必要がなくなったのではなかろうか。私は山南王の名義による朝貢が姿を消すのはこのためであったと思っている。

## 「三山統一」の説話はどうして生まれたか

一四七一年に申叔舟が著した『海東諸国紀』の記述による限り、当時「三山分立」ないしは「三山統一」の伝承があったようには思われない。また一五二二年に尚真王が真玉橋をかけさせ、その頌徳のために「真玉湊碑」をたてさせている。おそらくこのころまで琉球国内の交通事情、ひいては政治状況は十五世紀初めのそれと大差なかったのが、国内の統一はこのころから急速に進んだのであろう。その最も重要な原因が明との貿易量の減少にあったことはたしかである。

これより前一四六一年に明で『大明一統志』という地理書が編纂され、その巻八十九琉球国の条に「本朝洪武中其の国分かれて三となる。曰く中山王、曰く山南王、曰く山北王と。皆使を遣わして朝貢す。永楽初其の国王嗣立して皆冊封を受く。自後惟中山のみ来朝すること今に至るも絶えず。其の山南、山北の二王は蓋し「中山の」併せる所となるという」とある。

おそらく尚真王の時代にこの情報が何らかの形で琉球に伝えられたか、あるいは一五三四年冊封使として琉球を訪れた陳侃の『使琉球録』（一五三四年をあまり隔たらない時期に刊行された）が琉球にもたらされ、そこに引用された上記の記事に基づいて、当時進行しつつあった急速な全島統一に必要な根拠を与える必要から「三山分立」と「三山統一」の説話が創作されたのではなかろうか。




豊見城グスクの縄張り推定図（豊見城村教育委員会）

# 組踊『未生の縁』について

第２回講座　平成８年１２月７日
豊見城村立中央公民館

## 講師紹介


當間　一郎（とうま　いちろう）
沖縄県立博物館長


出生地：那覇市
生年月日：1938年8月19日
最終学歴：国学院大学文学部修了（１９６０）
経　歴：１９６１年首里中学校、１９６３年知念高校、１９６８年国際大学専任講師、１９７８年県教育庁文化課、１９８３年県観光文化局文化振興課、１９８６年県教育庁文化課
１９８９年県立図書館
所属学会：南島史学会、古典と民俗学の会、沖縄文化協会、沖縄芸能史研究会副会長、芸能学会、楽劇学会、
受　賞：第８回沖縄文化協会賞、仲原善忠賞（１９８６年）
１９９２年度高崎博士記念賞受賞
著　書：「組踊選集」、「組踊の世界」、「沖縄多良間島の組踊」、「沖縄の祭りと芸能」、「沖縄の芸能」、「沖縄芸能論考」、「組踊研究」
その他監修、編集、共著、論文多数

# 組踊「未生の縁」について

この組踊は、八重山石垣市登野城在の伊舎堂用八氏が所蔵する『組踊集』に収められているもので、最近発見した組踊写本である。たいへん興味深い内容と展開で、今後の組踊研究に貴重な台本となろう。

この台本については、伊波普猷著『校註琉球戯曲集』（昭和四年、春陽堂）末尾の「琉球作戯の鼻祖玉城朝薫年譜ー組踊の発生ー」三十ページに、「其他女身替外二組のあったことも知れるが、これらの組踊は最早見出すことが出来ない」とある。「外二組」中の一組であることはほぼまちがいない。後説するが、伊波普猷の出典は、一七五六年に来島した冊封使周煌の『琉球国志略』に記録されている組踊の紹介だからである。

「未生の縁」は、タイトルの示すように、生まれぬ前から親同志が堅くいいなずけてあった男女が、身体的苦痛等多くの困難をのりこえて、深い愛情で結ばれるという、美しい組踊である。若い男女を強く結びつけるなかだちとして、玉の乙鶴という娘が信仰する観音様の尊いお告げをあげている。

まず、あらすじを紹介すると、保栄茂按司と平良按司は竹馬の友であるが、結婚後もなかなか子宝にめぐまれない。もし両家に運よく男女がさずかったら、いいなずけをして、将来、めおとにさせようと、親同志が約束していた。念願がかない、保栄茂家に女児、平良家に男児が誕生する。しかし、平良按司の夫人は、鶴千代が生まれて三年後に亡くなり、後妻を迎える。後妻との間にも次男が誕生する。長男の鶴千代は、後妻（まま親）の仕打ちで毒を盛られて、失明寸前になる。

一方、保栄茂按司は、娘の乙鶴が十二、三歳頃に亡くなる。平良按司は、鶴千代が目が不自由のため、実弟の饒波の比屋の考えを受け入れて、両家の婚約解消をはかるが、保栄茂側は、親同志の約束を破棄することができぬと、婚約を解消しない。饒波はもどって平良按司に伝えると、按司やまま親（後妻）は、保栄茂の婿養子にするよりは、八重瀬嶽の洞穴へすてて、のたれ死させようと計画し、実行する。保栄茂家の乙鶴

は、その夜、夢に深く信じている観音様があらわれ、「婚約者の鶴千代の病は、まま親が毒を盛ったためで、一時的なものであるので、洞穴から助け出して、手厚く介抱すれば、二十日間ほどで全快するであろう」とお告げがある。

観音様のお告げを信じ、堅く守って、八重瀬嶽の洞穴から鶴千代を救い出す。そして乙鶴はじめ母のをなぢゃら等、保栄茂家をあげて養生につとめ続けたところ、お告げ通りにやがて全快する。保栄茂家の家臣である武富の子は、をなぢゃらの命を受けて、鶴千代君を引きつれて、平良按司のもとに、これまでの報告とお願いに出かける。武富は、観音様のお告げを一部始終お伝えして、吉日を選んで婿養子のお祝いをすることを申し伝える。

平良按司は、妻が鶴千代に毒を盛り、めくら同然にしたことをはじめて知り、大いに怒る。即刻、家から追い出すよう家臣にいいつける。鶴千代の熱心なお願いや武富の子の心ある説得で、平良按司は、妻の仕打ちをゆるすことを約束する。後妻は大変な事をしでかしたと、これまでの行ないを悔いる。平良按司は、保栄茂のをなぢゃらや乙鶴へのお礼を鶴千代や武富の子に託する。そして長男鶴千代の全快をお祝いする。

一方、保栄茂家では、平良家からもどった鶴千代君と武富の子を迎えて、結婚の祝宴をひらく。

全体は、六段構成である。第一段は、保栄茂按司と平良按司両家の縁組みの話と、平良家に次男誕生のお祝いがある。第二段は、平良按司の実弟・饒波のひやは、兄の按司に鶴千代がめくらになったのを理由に、保栄茂家との婚約解消を進言する。按司もその気になり、饒波のひやを保栄茂家へつかわす。しかし、親同志の堅い約束であるので、亡き父の承諾なしには解消できぬとはねつける。平良家では、後妻の入れ知恵で、めくらの長男鶴千代を、八重瀬嶽の洞穴にすてることをきめ、家臣を使って捨てさせる。

第三段は、親のきめたことだから、そむくわけにいかぬ鶴千代は、家臣にともなわれて、八重瀬嶽の洞穴に出かける。鶴千代は、自分が死んだら亡き母の墓に葬ってくれるよう頼む。第四段は、保栄茂の玉の乙鶴

は、夢に観音様があらわれ、鶴千代の病は、後妻が毒を盛ったためであり、助け出して養生すればなおるので、すぐ洞穴からつれ出しなさいとお告げがある。家臣を使い、無事鶴千代をつれ出す。

第五段は、保栄茂家に迎えられた若按司は、養生のかいあって全快する。若按司は保栄茂家の皆に感謝する。をなぢゃらは、武富の子に平良家に行き、若按司の病の全快を知らせるとともに、婿養子にとることを伝えさせる。若按司も同行する。第六段は、武富の子の語る観音様のお告げをきき、平良按司は後妻の悪だくみを怒り、即刻追い出すよう家臣にいいつける。若按司はまま母をかばい、追い出さぬよう再三お願いする。わが子や武富の子に説得されて、按司は妻をゆるす。まま親は自分の行ないを悔いる。平良家では長男の全快祝いをし、保栄茂家では鶴千代と乙鶴の結婚を祝う。

この組踊の創作年代や作者については、今のところ、記録がないので不明である。登場人物の出入り、場面の転換など動きがある。多くの登場人物の設定、問答のリアルさなど、これまでの組踊にない新しさを持っている。沖縄芝居の雰囲気をももちあわせた作品といえよう。登場人物は次の通りである

(1) 保栄茂按司（保栄茂家のあるじ、長い間、子宝に恵まれず苦慮したが、娘乙鶴をさずかる）
(2) をなぢゃら（保栄茂按司の夫人。夫亡きあと、娘乙鶴と言動をともにして、平良家の長男鶴千代と娘を結婚させる）
(3) 乙鶴（保栄茂按司の一人娘。父の遺志を堅く守り、冷静に判断し、行動する。母と心をあわせて鶴千代を助け、めでたく結婚する）
(4) 武富の子（保栄茂家の家臣。保栄茂家の使いとして平良家へ出むき、つとめを果たす）
(5) なへたる（保栄茂家夫人の使い。をなぢゃらの命で八重瀬嶽へ出かけ、平良家の若按司を助け出す）
(6) 供（なへたると一緒に、八重瀬嶽に出かける）
(7) 平良按司（平良家のあるじ。長い間子宝に恵まれなかったが、長男鶴千代をさずかる）
(8) をなぢゃら（平良按司の後妻。按司との間に次男を

生む。長男を亡きものしようと毒を盛る）

(9) 饒波のひや（平良按司の実弟。兄のいいつけで、めくら寸前の鶴千代と乙鶴の結婚解消の使いで、保栄茂家に出かける）

(10) 平良の若按司鶴千代（平良按司の長男。前妻との子。ままの親の悪だくみで毒を盛られ、洞穴にすてられる。しかし、保栄茂家のお蔭で助け出され、全快する。前世からの約束がかない、乙鶴と結婚する）

(11) 供かしき（平良按司の家臣。若按司を八重瀬嶽へつれていく）

使用されている音楽は、第一段に「しらしはり川ふし」「節名不明」「勝連ふし」の三曲が使われ、第二段はなし。第三段は「金武ぶし」「東江ぶし」の二曲、第四段は「七尺ぶし」「恩納ぶし」「立雲ぶし」の三曲が使われている。第五段は「道島やり主の前ぶし」「十七たふぶし」の二曲、第六段は「ぢゃんなぶし」「しゆらいぶし」の二曲が使われている。

この組踊は、前述した冊封副使周煌（一七五六年来琉）の『琉球国志略』巻之十三「人物」の孝義と烈女に、主人公二人がくわしく紹介されている。つぎに、平田嗣全訳注『周煌　琉球国志略』の訳文を紹介する。

## 孝　義

鶴寿は平良按司の長子で、保栄茂按司の娘乙達呂を娶った。鶴寿が三歳の時、母が亡くなり、その後、間もなく保栄茂も亦、卒したが、子供が無く、鶴寿は大きくなってから、自分から進んで保栄茂に聟入りした。継母はその子を愛し、鶴寿に毒をもり、その両眼を盲にし、平良に乙達呂を離婚させようとしたが女は聞かなかった。また、蠱（まじない）して平良に之を八頭山の石穴の中に捨て、餓死させようとした。乙達呂が夢の中で、それを見たので、母にそのことを話した。乙達呂は鶴寿を探し出し、医者に治療させ、また、目が見えるようになった。保栄茂夫人が鶴寿を平良に送り還して、そのわけを話したので、平良も事の次第が判り、大いに怒り、その後妻を放逐した。鶴寿が泣いて「児は幼い頃から母を頼りに生きており、母のこれまでの所業は、

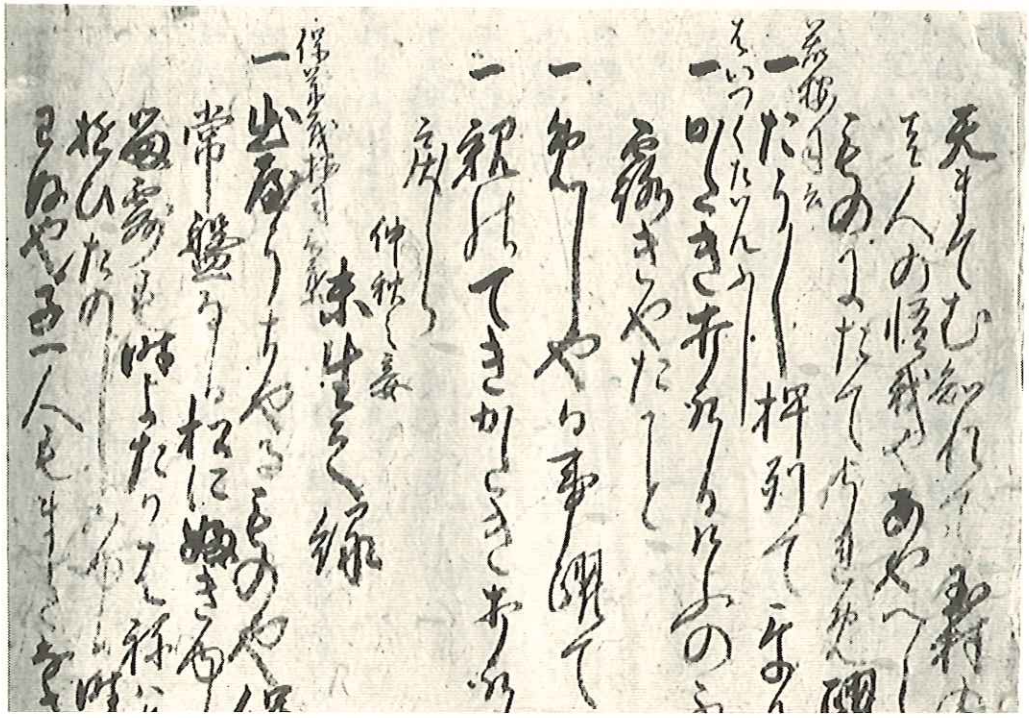
たまたま魔がさしただけのことであります。一時の過誤で放逐してはいけません。而かも、父母の高恩を忘れることは出来ません。その上、母が出て行けば、幼い弟は誰を頼ったらよいのでしょうか」と申し上げた。涙が雨のように流れ落ちた。平良はその心意に感じ、継母に譴(せめ)を加えず、乙達呂を迎え、鶴寿に保栄茂の後を継がせて按司とした。乙達呂については、別に烈女を見よ。

## 烈女

乙達呂は、鶴寿の妻、で保栄茂按司の女である。初め、保栄茂と平良按司とは仲がよかった。或る日、お互に、未だ生まれてもいない男女の縁を結んだ。その後、平良は男の子の鶴寿を生み、保栄茂は女子を生んだ。その女子が乙達呂である。鶴寿は三歳の時に母を亡くした。継母は自分の子を愛し、鶴寿をねたみ、稍々長じてから、こっそり薬をもってその両眼を盲にした。それから間もなく、女も亦、兄弟をなくし孤子となった。母の保栄茂夫人は鶴寿を入りむこにして業をつがせようとした。平良は自分の弟の饒波庇椰を遣わし「鶴寿は不幸にして廃人になっている。謹んで前約をお辞りし、別の人と結婚するようにお願いします」と告げさせた。夫人は女(むすめ)に、このことを話した。女は「先の按司が前に婚約しています。どうしたら亡くなった按司に前約を変えさせることが出来ますか。鶴寿は盲になっても、未だ生まれる前から定まった人であります。父に背き、夫を棄てるのは真に、禽獣とかわりません」と言った。饒波は、また婉曲にこれを諭したが、女は「なやんでいる吾が子を九泉下に従(つ)れて行ってくれれば、妾は自分で父に、このことを申し上げます。かりそめにも、許すという御言葉はない筈です」と。平良は「愚女は家門を顧みないが、執拗さもここまできたとは」と言った。継室が、復、中傷して「もし鶴寿がいなければ、女は自分で別の所に嫁ぎましょう。これを殺すことは出来ませんから、暫くの間、鶴寿を放逐し、女が結婚するのを待ち、更めて話し合い、それから呼返しても、未だおそくはありません」と言

った。饒波にこのことを言い含めて、遂に八頭山中の石穴の中に放逐した。この夜、女は夢の中で一神女がそのわけを、みな話し、その上、放逐の場所を指示された。夢からさめて、このことを母に話した。そこで人を遣わして夢の中で示された方向へ行き、之を探し一緒に連れて帰った。保栄茂夫人が医者を呼んで治療させたので目は治った。そこで、鶴寿を平良に送り返し、約束通り婚礼をあげた。

一七五六年来琉の周煌の『琉球国志略』所収の巻十三の人物編から紹介した。その年の冊封使一行に手渡した『故事集』（上演組踊の解説書）からの転載であれば、この組踊が、他の組踊（「巡見官」「万歳敵討」等）とともに上演されたのではないかと考えられる。



「未生之縁」の筆写本　石垣市の伊舎堂用八氏所蔵

| 台詞 | 口語訳 |
| --- | --- |
| 仲秋之妾（宴カ） | |
| **未生之縁** | |
| 保栄茂按司言葉 | |
| 一　出やうちやるものや | まかり出た者は |
| 保栄茂按司 | 保栄茂按司 |
| あゝ恵（ある）御世や | ああ恵ある御世は |
| 常盤なる松に | 常盤なる松に |
| ふきゆる嵐も | 吹く嵐も |
| 枝やうとかさぬ | 枝は驚かさぬ |
| 降る雨露も | 降る雨露も |
| 時よたかはねハ | 時は違わねば |
| 夜も戸くらし | 夜は戸くらし |
| 里やしんさくぬ | 里はしんさくの |
| 遊ひたのしみゆる | 遊びを楽しむ |
| 時に生れとて | 時に生れて |
| 平良の按司とわぬや | 平良の按司と私は |
| 子一人もまたなさぬ | 子を一人も生れぬ |

---

| | |
| --- | --- |
| いきやて時々や | 出あって時々は |
| 願はなしすゆすや | 願い話をするが |
| 立願のかなて | 願い事がかなって |
| 子もまたなしゆら | 子にもまた恵まれようか |
| 男女まじて | 男児女児をまじえて |
| 生れともすらは | 生れでもしたら |
| めとの縁ん結はてやり | 夫婦の縁を結ばせようと |
| 約束よしちゃうて | 約束をして |
| 朝夕願たこと | 朝夕に願ったら |
| 平良の按司や嫡子 | 平良の按司には嫡子を |
| わぬや女子 | 私には女子を |
| ゑの月になち | 同じ月に生れて |
| 二人かとし今年 | 二人の年は今年 |
| 七歳になよん | 七歳になる |
| あゝ平良の按司の | ああ、平良の按司の |
| 先をなぢやらや | 先妻は |
| 四年なての秋 | 四年前の秋に |
| 草葉の露と | 草葉の露と |
| 消はてて | 消えはてて |

あとをなぢゃらと　後妻は
けふ次男誕生よやれは　きょう次男誕生であるので
いそち御祝ひにいちよん　急ぎお祝いに行く
やあ〳〵　もしもし
平良の按司よ　平良の按司よ
〳〵　平良の按司よ
平良按司言
一　やあ保栄茂の按司　ねえ保栄茂の按司
いきやしかなけふや　どうしたか今日は
心まちしゆたん　心待ちにしていた
保栄茂按司ことハ
一　先御次男御誕生　まずご次男誕生
ふこらしやとあよる　おめでたいことである
平良按司言
一　あゝ気遣いよゆるち　ああ、心配も癒えて
落着とやよる　ほっとしている
けふや平良とゝろきに　今日は平良轟川に

---

川おれよしめて　川降りをさせて
祝ひふしやあたん　お祝いをしたかった
やあ供のきや　ねえ供の者
急ち川おれの　急ぎ川降りの
祝はしめれよ　祝いを始めよ
供言
一　をかんちゆめやへて　かしこまりました
歌しらしはり川ふし
一　鶴亀や松　鶴亀は松
竹のごと互に　竹の様にお互いに
百年いつまでも　行末長く
むたひさかへ　栄えあれ
同右同
一　二葉ある松の　二葉ある松が
老木なるまでも　老木になるまでも
御かけふさへめしやうれ　お元気でましませ
わ按司かなし　わが按司加那志
保栄茂按司言

あとをなぢゃらと　後妻は
けふ次男誕生よやれは　きょう次男誕生であるので
いそち御祝ひにいちよ　急ぎお祝いに行くん
やあ〳〵　もしもし
平良の按司よ　平良の按司よ
〳〵　〳〵
平良按司言
一　やあ保栄茂の按司　ねえ保栄茂の按司
いきやしかなけふや　どうしたか今日は
心まちしゆたん　心待ちにしていた
保栄茂按司ことハ
一　先御次男御誕生　まずご次男誕生
ふこらしやとあよる　おめでたいことである
平良按司言
一　あゝ気遣いよゆるち　ああ、心配も癒えて
落着とやよる　ほっとしている
けふや平良とゝろきに　今日は平良轟川に

---

川おれよしめて　川降りをさせて
祝ひふしやあたん　お祝いをしたかった
やあ供のきや　ねえ供の者
急ち川おれの　急ぎ川降りの
祝はしめれよ　祝いを始めよ
供言
一　をかんちゆめやへて　かしこまりました
歌しらしはり川ふし
一　鶴亀や松　鶴亀は松
竹のごと互に　竹の様にお互いに
百年いつまでも　行末長く
むたひさかへ　栄えあれ
同右同
一　二葉ある松の　二葉ある松が
老木なるまでも　老木になるまでも
御かけふさへめしやう　お元気でましませ
れ
わ按司かなし　わが按司加那志
保栄茂按司言

一　出来た　〳〵　　でかした　でかした
　まつまて　　まず待て
　けふやふこらしやの　　今日は喜ばしく
　立ふしやよあもの　　踊りたいから
　とふ〳〵よらて　　さあさあ集い
　踊てわしら　　踊って忘れよう

平良按司言
一　とふ〳〵おとて　　さあさあ踊って
　遊びふしやの　　遊びたい

歌勝連ふし
一　常盤なる松も　　常磐なる松も
　節よ待請て　　季節を待ちうけて
　はるなれハまさる　　春になれば一段と勝る
　色の清らさ　　色のうつくしさよ

饒波のひや言
一　是や平良の按司の　　是は平良の按司の
　弟饒波のひや　　弟の饒波のひや
　あゝ按司の　　ああ、按司の
　嫡子鶴千代や　　嫡子鶴千代は

---

　めくらなてをれハ　　盲目になっているので
　気の毒とやゆる　　気の毒である
　やあ〳〵やきかなし　　さあさあ、兄上
　保栄茂の按司の娘　　保栄茂の按司の娘
　玉の乙鶴や　　玉の乙鶴は
　姿よか心やまさて　　姿よりも心が美しく
　すくれものやれハ　　優れた人なので
　国々の按司部　　村々の領主たちが
　嫁にすらんてやり　　嫁にしようと
　やくすくよしゆすか　　約束をするが
　平良若按司と　　平良若按司と
　生れらぬ先からの　　生れぬ先からの
　縁組とやるてやり　　縁組だといって
　断よんてやりきけハ　　断っているときくので
　鶴千代や　　鶴千代は
　めくらなてをれば　　めくらになっていれば
　いそち縁組よことハら　　急ぎ縁組をことわれば
　ハ
　保栄茂按司や　　保栄茂按司は

死後の事やれは　死後の事であるので
聟猶子とて　聟養子をとり
世つきしゆるはからい　世継ぎをするはからいを
も
いよらまたやれハ　いうはずだから
とふ〳〵いそち　さあさあ、急ぎ
御断めしやうれ　おことわりしなさい
平良按司言
一　あゝ此事や磯(はた)と　ああ、この事はすっかり
打忘てをたん　忘れていた
延々になちすまぬ　のべのべにしてすまぬ
此事とやよる　この事である
とふ〳〵けふに　さあさあ、今日にでも
御断おんみゆけて　おことわり申しあげて
きやうれ　きなさい
饒波のひや言
一　をかんちゆめやへて　かしこまりました
やあ〳〵饒波のひやか　やあやあ、饒波のひやが
御見舞のやう　お会いにきたことを

---

おんみゆけやれ　申しあげてくれ
保栄茂按司供言は
一　おふ　（一礼）
やあ〳〵　やあやあ
をなちやらの前よ　おくさま
饒波のひやか　饒波のひやが
御見舞たやへる　お面会でございます
をなちやら言
一　急ちおんつかいしやう　急ぎご案内しなさい
れ
饒波のひや言
一　平良の按司の　平良の按司の
嫡子鶴千代や　嫡子の鶴千代は
めくらなてをれハ　盲目になっているので
縁組の事や　縁組の事は
御断　おことわり
おんみよけれてやりの　申しあげれとの
使たやへる　使いであります
をなちやら言

一　やあ饒波のひや　　やあ、饒波のひや
此事やわぬ一人か　　この事はわたし一人の
はからひやまたならぬ　　考えではどうにもならぬ
なし子かたらてと　　娘と話しあって
御返事やさんしゆもの　　ご返事をします
やあ〳〵なし子　　さあさあ、娘よ
平良の按司の御使に　　平良按司の使者として
饒波のひやか　　饒波のひやが
いむうちゆん　　参っている
若按司や　　若按司は
めくらなてをれハ　　盲目になっているので
縁組の事や　　縁組の事は
御断てやりあん　　おことわりといっている
玉の乙鶴

一　やあ母親よ　　ねえ母上
縁組の事や　　縁組の事は
生らぬ先なかい　　生れぬ先に
平良の按司と　　平良の按司と
父親と御約束　　父上とお約束が

---

あたんてときちやる　　あったときいている
父親の死後の　　父上の亡き後の
ことやれハ　　ことなので
此事や返事　　この事は返事
めしやいのなよめ　　する事ができようか
またよか人の義理や　　また武士の義理は
たといめくらなて　　たとえめくらになって
をたむてやり　　いようと
のかす見捨る　　どうして見捨てる
道のまたあるひ　　道がまたあろうか

饒波のひや言

一　やあ玉の乙鶴よ　　ねえ玉の乙鶴
なまのい言葉や　　今のことばは、
道理至極　　道理ごもっともで
ふこらしやとあすか　　うれしいことであるが
鶴千代や　　鶴千代は
嫁むかへて　　嫁を迎えて
くひやならぬ　　悔いはできぬ
ものやれハ　　身であるので

是非よ聞留れ　必ず聞きとめてくれ
縁組やいひもとさ　縁組はなかった事にしよう

玉の乙鶴
一　やあ饒波のひや　ねえ饒波のひや
うれ是よいちも　あれこれといっても
母親とわぬ二人か　母上と私の二人が
返事のまたなよめ　返事ができようか
とても後生までもいもち　いっその事後生まで参り

父親におんみよけて　父上に申しあげて
よたしやてやりあらハば　よろしいという事であれば
をかんちゆめやへら　その通りに致しましょう
をなちやら言
一　やあ饒波のひや　ねえ饒波のひや
なまのやう　只今の通りに
御返事されゝ　ご返事なさい
饒波のひや言

---

一　なまのことやれハ　只今の通りであれば
力及ハらぬ　どうにもなりません
此やう御返事しやへら　このようにご返事しましよう

やあ〳〵やきかなし　やあやあ、兄上
平良の按司言
一　むとてちやめ　もどってきたか
饒波のひや言
一　おふ縁組の事や　一礼　縁組のことは
御断たちやへらぬ　お断りできませんでした
平良の按司言
一　あゝ御断たゝぬてすや　ああ、お断りできぬとは
のふことか　どういうことか
饒波のひや言
一　先縁組の事や　まず、縁組の事は
御断のやう　お断りの事を
おんみゆけたれハ　申しあげましたら
をなぢやらや　おくさまは
玉の乙鶴と　玉の乙鶴と

御談合あれハ　お話し合いがあり
玉の乙鶴か　玉の乙鶴の
言言葉に　ことばとして
縁組の事や　縁組は
生らぬさきなかひ　生れぬさきに
平良の按司と　平良の按司と
父親と御約束　父上とお約束が
あたんてときちやる　あったときいている
父親や死後やれハ　父上が亡くなった後なので
母親の事や　母上が
返事めしやいのなよめ　返事なさる事ができようか
またよか人の義理や　また武士の義理は
縦令めくらなたんてやり　たとえめくらになっても
のかす見捨よる　どうして見捨てる
道のまたあるひ　道がまたあるか
うれこれんいらぬ　あれこれといらぬ

---

迚も後生まてん　いっそのこと後生まで
いもうち　いらして
父親におんみよけて　父上に申しあげて
よたしやてやりあらは　よろしいという事であれば
をかんちゆめらてやり　承知しましたと
いふすに　いうので
道理至極差迫て　道理ごもっともだと
戻てきやへたん　もどってきました
平良按司言
一　あゝなまのい言葉や　ああ、今のことばは
一々道理至極　いちいちごもっとも
玉の乙鶴や　玉の乙鶴は
ふんの賢女とやよる　まことに賢女である
やあ饒波のひや　やあ饒波のひや
やあ真なべ樽よ　ねえ真なべ樽よ
御断しゆる　おことわりする
はからいやならに　考えはないか
をなちやら言

一　やあ〳〵保栄茂の按司　やあやあ保栄茂按司は
や　聟養子をとって
聟猶子とてと　世継きを立てなさる
世つき立めしやいる　ことになっているので
筋になてをれは　鶴千代が
鶴千代か　生きている間は
生ちをる間や　あそこのためにならぬ
あまの為ならぬ　急ぎ殺して捨てさせるか
急ち殺ち捨らすか　八重瀬山に
八重瀬山なかひ　生きたまま捨てさせるか
生なから捨らすか　二つに一つを
二に一　おきめください
おきハめよめしやうれ
平良の按司ことハ
一　あゝあまの為てやり　ああ、先方のためといって
殺しゆすも捨よすも　殺すのも捨てるのも
人間の肝の　人間の心は
あんやまたならぬ　そんなにはまたできぬ

---

やあ饒波のひや　ねえ饒波のひや
此事や是非よ　この事はぜひ
はからやひくれよ　考えてくれ
饒波のひや言
一　おふをなぢやらの　一礼　おくさまの
いやれる事　いわれるように
鶴千代か　鶴千代が
生ちをる間や　生きている間は
縁組や御断　縁組はおことわり
ならぬ筋やれハ　できぬ立場だから
あまの為ならぬ　先方のためにならぬ
にやや思きやい　もはや思いきって
先方の世つき　先方の世継きを
立る間や　立てる間は
八重瀬のふらに　八重瀬の洞穴に
捨おかしやへら　捨て置きましょう
をなぢやら言
一　饒波のへやか　饒波のひやが
いやれる事　いう通りに

先方の世つき　先方の世継きを
たいしすや　するのは
道ならぬ事やれは　道ならぬ事であるので
とふ〳〵いそち　さあさあ急ぎ
おきはめよめしやうれ　お話しあい下さい

平良按司言

一　先方の世つき　先方の世継ぎを
たいしゆんてあれば　するということであれば
我子よ借ておきゆる　わが子を惜しみ置く
道やまたないらぬ　方法はまたない
とふ〳〵急ち　さあさあ、急ぎ
捨らしやうれ　捨てなさい

饒波のひや言

一　をかんちゆめやへて　かしこまりました

若按司言

一　平良若按司　平良若按司の
鶴千代とやよる　鶴千代である
めくらなてわぬや　めくらになった私は
生らぬ生れ　生れなければよかったの

---

に
露のみどやすか　はかない身であるが
命のつれなさや　命のつれないのは
生なから山に　生きているのに山に
捨られかいきゆん　捨られに行く

歌金武ふし

一　思きやひをても　あきらめていても
是迄よとめば　これが最後だと思うと
出立るきはや　出発する時は
袖のなミだ　かなしく袖をぬらす
川なかれせきとめる　川の流れをせきとめる
しからみやないらぬ　しがらみはない
けふまてやかしき　今日まではかしきと
つれてむち明日や　つれだって行き、明日は
山に捨られて　山に捨られて
ひちゆひをらとめは　一人でいるかと思えば
いきゆる道柴の　出かける道の
露と諸共に　露とともに

たんて玉の緒よ　　どうか玉の緒よ
消えてくいらな　　消えてくれるな

供言
一　とふ〳〵　　さあさあ
八重瀬につきやへたん　　八重瀬につきました

若按司言
一　やあ供のきや　　ねえ供の者
生けなから捨られす　　生きながらに捨てられる
のは

わぬやすかぬあとて　　私は好かないので
腹切いしなん　　腹を切り死のう
てやれしやすか　　とするが
父親のみをんき　　父上の仰せ事に
背からぬ　　背けずに
こままてやちやん　　ここまで来た
生ちゆてもいらぬ　　生きていても用はない
頓て死ぬはづとやよる　　まもなく死ぬはずである
死なハ母親の　　死んだら母上の
塚に送てくいれよ　　墓に入れてくれよ

---

供言
一　やあ思子　　ねえ若君
命なからへて　　命を大事にして
節よまちめしやうれ　　時期をお待ち下さい
先方の世つき　　先方の世継きを
すたんてやりきかは　　すると聞けば
急ち御迎に　　急ぎお迎えに
きやへらんしゆもの　　まいりますから
やあ思子　　ねえ若君

若按司言
一　やあ供のきや　　ねえ供のもの
かしき言

一　やあ若按司の前よ　　ねえ若按司様
わぬやこまなかい　　私はここに
をひふしやとあすか　　いたいのですが
大按司のおゆるしの　　大按司の許可が
ないぬあれハ　　ないので
けふやなく〳〵も　　きょうは泣く泣くも
戻てむちあちやも　　戻り、明日も

またとまひて　　またたずねて
おかみやへら　　お会いしましょう
若按司ことハ
一　やあかしき　　ねえかしきよ
いつ迄も名残り　　いつまでも名残り
互に思きよん　　お互いにあきらめよう
とふ〳〵　　さあさあ
急ち立もとれ　　急ぎ戻りたまえ
歌東江ふし
一　夢の世の中や　　夢の様なはかない世の中は
またをかむ事も　　再び見る事も
露の身のならひや　　露の身であるので
くれしや定　　定めにくい
歌七尺ふし
一　我か願のかなて　　わが願いがかない
夕部見ちやる夢に　　昨夜見た夢に
神のみすゝりの　　神のお告げが
あるか嬉しや　　あるのが嬉しい

---

玉の乙鶴言
一　保栄茂の按司のなし子　　保栄茂按司の娘
玉の乙鶴とやよる　　玉の乙鶴である
やあやあ母親よ　　ねえ母上よ
やああやよ　　ねえおかあさん
観音の　　観音様の
みすゝりのあもの　　お告げがある
みすくおんみゆかれ　　謹んでお聞き下さい
夕部暁月　　昨夜遅く
やすむ時分　　寝る頃に
清ら女やすか　　美しい女ですが
わか枕上に立寄ひ　　私の枕元に立ちより
平良若按司の　　平良若按司の
やまひやまゝ親の　　病いは継親が
毒かいとやよる　　毒を盛ったためである
またかふつみよ入て　　またうそいつわりをいい
八重瀬のふらに　　八重瀬のほら穴に
きのふ捨られてをもの　　昨日捨られているので
急ち我宿に　　急ぎわが家に

引こしやひ　つれ戻り
養生よすれ　養生をせよ
廿日の内に　二十日以内に
本腹よしゆん　本腹する
よかる日撰ひえらて　吉き日を選び
めとの糸縁よむすへ　夫婦の糸縁を結べ
二人が行末衛や　二人の行末は
見まふよむ　見守る
朝夕我おかむ　朝夕に私が拝む
（信心している）

観音とやるてやり　観音であるといって
やがて消うせて　まもなく消え失せ
おかまらぬともて　拝む事ができぬと思い
夢ハ打覚て　夢から覚めて
きもふしきしちゆん　不思議に思っている
観音のみすゝりや　観音のお告げは
たゝ事やあらぬ　ただごとでない
八重瀬かひあなあ　八重瀬に
御迎にやらしやへら　お迎えに行かせましょう

---

をなちやら言
一　やあなし子　ねえわが子よ
観音の御告け　観音のお告げが
なまの事やれハ　今の通りであれば
ふこらしやとあよる　嬉しいことである
やあなへ樽よ　ねえ、なべ樽よ
急ち八重瀬　急ぎ八重瀬を
さかし尋やひ　探し尋ねて
若按司よ　若按司を
押列てきやうれ　連れてきなさい
なへたる言
一　おふ　一礼
やがておし列て　まもなくおつれして
きやへらんしゆもの　まいりますから
こゝろやすくと　ご安心して
御待めしやうれ　お待ち下さい
歌恩納ふし
一　のかす若按司や　なぜか若按司は
山に捨られて　山に捨られて

いまいんてやり聞けハ　いらっしゃるときけば
急ちいきゆん　急ぎ出ていく

供言
一　八重瀬にきやへたん　八重瀬につきました
なへたる言
一　やあ〳〵　やあやあ
洞の内ち山々　洞穴や山中を
さかし尋れよ　探し尋ねよう

供言
一　おふ　一礼
はあ此洞の内に　ハア　洞穴の中に
若按司や　若按司は
うちやいんしやいへん　おられました
なへたる言
一　やあ〳〵　やあやあ
保栄茂のをなちやらの　保栄茂のおくさまの
御使とやよる　お使いである
若按司や　若按司は
きのふこの洞に　昨日この洞穴に

---

捨られていまいん　捨られています
急ち尋やひ　急ぎ尋ねて
我宿に引こすよてやり　わが宿に移すようにと
観音の　観音の
みすゝりのあむの　お告げがあるので
急ち尋れよ　急ぎ尋ねよ
てやりあてと　とあるので
とまいてわなきちやん　さがして私はきました
とふ〳〵　さあさあ
互におし列て　お互いにつれだって
戻やへら　戻りましょう

若按司
一　わぬや富盛村の者　私は富盛村の者です
薪木とりかちやすか　薪木を取りに来たが
としまちゆんてやり　友を待つと
此洞に昼寝しゆん　この洞穴に昼寝をしている
尋よる思里や　お探しのお方は
わぬや知らぬ　私は知りません

なへたる言

一　やあ若按司よ　　ねえ若君よ
観音の御告け　　観音のお告げの
物語しへら　　話をしましょう
みすくおんみゆかれ　　尊くお聞き下さい
平良若按司の　　平良若君の
やまひやまゝ親の　　病は継親の
毒かいとやよる　　毒によるものである
またかふつミよ入て　　またうそいつわりを言って
八重瀬のふらに　　八重瀬の洞穴に
きのふ捨てられて　　昨日捨てられて
をもの　　いるので
急ち尋やひ　　急ぎ探して
わか宿に引こしやひ　　わが宿につれもどして
妙薬よ用ひ　　妙薬を用いて
養生よすれ　　養生よせよ
廿日の内に　　二十日内に
本腹よしゆん　　全快しよう

---

よかる日撰ゑらて　　吉日を選んで
めとの糸縁よむすへ　　夫婦の糸縁を結べ
二人か行末衛や　　二人の行末は
見守よん　　見守る
わぬや観音と　　私は観音で
やるてやり　　あるといって
やがて消えうせて　　まもなく消え失せて
思子や夢覚て　　おじょうさんは夢からさめて
をなちやらとかたらやい　　母上と話しあい
御迎ひにちやるこゝろ　　お迎えにきたのを
若按司やしらぬ　　若按司は知らない
仏のみすゝりや　　仏のお告げは
あだなよとめは　　あだなよと思うと
慈悲よ定めらぬ　　慈悲を定めぬ
人のらめしや　　人がうらめしい

若按司言

一　やあ〳〵　　やあやあ

観音の御告げ　観音のお告げが
なまの事やれは　今のようであれば
偽やならぬ　偽はできない
平良若按司とやよる　平良の若君である
思無蔵か　あのお方の
けふの心実や　今日の真心は
言の葉に出ち　ことばに出して
いちやつくさらぬ　言い尽すことはできない
ふんの我か病の　まこと私の病が
快気ともすらハ　快気でもしたら
思無蔵恩や　あの方のご恩は
一期ちゝにかめら　一生感謝します
なへたる言
一　とふ〳〵急ち　さあさあ、急ぎ
おしつれて戻やへら　つれだって戻りましょう
若按司言
一　なまのことやれハ　只今のことであれば
此なりよなても　この身なりになっても
のゝ御恥かしやが　何ではずかしかろう

---

いそぢ列戻ら　急ぎ列れもどろう
歌立雲ふし
一　い言葉の情け　いわれる言葉の情
けふの心実や　今日の真心は
いちや尽さらぬ　いい尽せないほどで
浜の真砂　浜の真砂の様なものである
なへたる言
一　やあ〳〵　もしもし
おなちやらの前よ　おくさま
若按司よ押つれて　若君をお連れして
戻てきやへたん　戻ってまいりました
をなちやら言
一　やあ〳〵　やあやあ
武富の子　武富の子を
急ちよへよ〳〵　急ぎ呼びなさい
武富のし言
一　おふ　一礼
急ち御入めしやうれ　急ぎおはいり下さい

をなちやら言

一　やあ若按司よ　　ねえ若君よ
うの病気引請けて　　この病になられて
山に捨てられて　　山に捨てられ
いちいやらぬ難儀　　いうにいわれぬ難儀
哀やたら　　悲しかったでしょう

若按司言

一　二所の情け　　お二方のお情
けふの心実や　　今日の真心は
山よりも高く　　山よりも高く
海よりも深さ　　海よりも深い
長浜の真さかい　　長浜の真砂は
よてや尽すとも　　かぞえ尽すとも
言の葉に出ち　　ことばに出して
いちやつくさらぬ　　いい尽すことはできない
おまの事やれハ　　そちらの事であるので
このなりになても　　この身なりになっても
のゝおはつかしやとも　　何の恥かしいことかと思
て　　い

---

列てきやへたん　　一緒にきました

をなちやら言

一　やあ若按司よ　　ねえ若君よ
観音の　　観音の
みすゝりのまま　　お告げの通りに
養生よすらは　　養生さえすれば
やかて快気　　まもなく快気
さんしゆもの　　するから
とふ〳〵　　さあさあ
こゝろやす〳〵と　　こころやすらかに
をれよ　　いなさい

若按司言

一　をかんちゆめやへて　　かしこまりました
をなちやら言

一　やあ武富の子　　ねえ武富の子よ
けふやこゝてるさ　　今日は心がめいっている
あらやれは　　はずだから
能羽しめて　　踊りを仕組まして
伽よしめれ　　楽しませてくれ

武富の子言
一　をかんちゆめやへて　かしこまりました
歌道の島やり主の前ふし
一　おやくめさあても　おそれ多いことであるが
おとりはね遊へ　踊りを仕組んで遊べ
けふや若按司の　今日は若君を
御伽やれハ　おなぐさめだから
同
一　たゝいかれ〳〵　大いに喜べ　大いに楽しめ
はたちゆらの二才衆　肌美しい若者達よ
手打足拍子　手を打ち足拍子をとり
おとりあそへ　踊って遊びなさい
をなちやら言
一　あゝゑい事とやよる　ああ　嬉しい事である
やあ武富の子　ねえ武富の子
若按司よ　若君を
見ふしやあもの　見たいから
いそちよてきやうれ　急ぎ呼んできなさい

武富の子言
一　をかんちゆめやへて　かしこまりました
やあ〳〵　やあやあ
若按司よ〳〵　若君よ　若君よ
をなちやらの　おくさまが
御用たやへる　お呼びであります
をなちやら言
一　やあ若按司よ　ねえ若君よ
観音の　観音の
みすゝりのまゝ　お告げの通りに
快気しやす見れハ　全快しているのを見れば
ふこらしやとあよる　喜ばしいことである
若按司言
一　御蔭にわか病や　お蔭様で私の病が
本腹よしやれハ　全快したら
この御恩とふとさや　このご恩尊さは
一期ちゝに　一生涯
かめやへら　感謝申しあげます
をなちやら言

一　やあ武富の子　　ねえ武富の子
急ち平良の按司に　　急ぎ平良按司に
若按司の病や　　若君の病は
神のみすゝりのまま　　神のお告げの通りに
養生よしやれは　　養生をしたので
本腹よしやん　　全快した
聟猶子とて　　聟養子にとり
世つき立やへら　　世継ぎを立てましょう
またけふあけてあちや　　また今日過ぎて明日は
や　　
よかる日撰てやいこと　　吉日ということで
の　　
ね引しゆんてやり　　結婚式をとり行なうと
こま〳〵と　　詳細に
おんみゆけてきやうれ　　申しあげてきなさい
武富のし言　　
一　をかんちゆめやへて　　かしこまりました
若按司言　　
一　やあ武富の子　　ねえ武富の子

---

わぬも拝みふしやあも　　私もお目にかかりたいか
の　　ら
とても列て　　いっそのこと一緒に
おかてきやへらに　　おあいしてきましょう
をなちやら言　　
一　あんやれハ能〳〵と　　そうであればよくぞ
落着もめしやら　　おちつかれて
おし列てむちおかて　　つれだって行きおあいし
いそち戻れ　　急ぎ戻りなさい
若按司言　　
一　おふ　　一礼
やあ〳〵父親よ　　やあやあ父上よ
やあ母親よ　　やあ母上よ
保栄茂のをなちやらの　　保栄茂のおくさまの
親子の情けゆへ　　親子のお情で
わか病や　　私の病は
快気しやへたん　　全快いたしました
とふ〳〵いそち　　さあさあ急ぎ
出ておめかけれ　　出てお会いしなさい

平良按司言
一　やあ鶴千代よ　　やあ鶴千代よ
はあふんの　　ハア本当に
本腹とやよる　　全快である

まゝ親言
一　よかて玉金　　よかったわが子よ
快気しやす見れは　　快気したのを見れば
うれしやなつかしやの　　嬉しくなつかしい
にやよしまらぬ　　もはやいう事はない

按司言
一　やあ武富の子　　ねえ武富の子
かにやるふこらしやや　　このような喜ばしさは
物にたてらぬ　　物にたとえられぬ

武富のし言
一　御尤たやへる　　ごもっともであります
やあ按司加那志　　ねえ按司加那志
わぬやをなちやらの　　私はおくさまの
御使たやへる　　お使いであります
廿日なての夜　　二十日の夜に

---

我思子に　　わがおじょうさんに
観音の御告けあすや　　観音のお告げがあるのは
平良若按司の　　平良の若君の
病やまゝ親の　　病は継親の
毒かいとやゆる　　毒が原因である
またかふつみよ入て　　またうそいつわりを言って
八重瀬のふらに　　八重瀬の洞穴に
きのふ捨られてをもの　　昨日捨られているから
急ち尋やひ　　急ぎ尋ねて
わか宿に引こしやひ　　わが宿につれかえって
養生よすれ　　養生をしなさい
廿日の内に　　二十日間で
本腹よしゆん　　全快する
よかる日撰ゑらて　　吉日を選び
めとの糸縁よむすへ　　夫婦の糸縁を結べ
二人か行末衛や　　二人の行末は
見まふよん　　きっと見守る
わぬや観音と　　私は観音で

やるてやり　あるといって
やがて消えうせて　まもなく消え失せ
思子や夢覚て　おじょうさんは夢から覚めて
をなちやらと語らやひ　母上と話しあい
八重瀬さかし尋やひ　八重瀬を探し尋ねて
保栄茂の城に　保栄茂の城に
引こしやひ　つれかえって
みすゝりのまゝ　お告げの通りに
御養生しやれハ　ご養生をすると
あの事御本腹　あのようにご全快で
たやへる　ございます
聟猶子とて　聟養子をとり
世つき立やへら　世継ぎを立てましょう
また今日あけてあちや　また今日過ぎて明日は
や
よかる日撰やれハ　吉き日であるので
観音の　観音の
みすゝりのまゝ　お告げの通り

---

御ね引よ　御結婚式を
めしやいんてやり　なさるとの
御案内に　ご案内に
よしれやへたん　参りました

按司言　ねえ武富の子
一　やあ武富の子　今の事をやったとは
なまの事しちやむてや　夢ほども知らない
夢程もしらぬ　やあ真鍋樽
やあ真なへ樽　お前のよもづらは
うかゝよもつらや　菩薩のようであって
菩薩の事あとて　心はまさに
心やふんの　畜生である
畜生とやよる　やあ供の者たち
やあ供のきや　あれの顔を見ると
あれかつら見れハ　腹がにえくりかえる
ハらの切わきゆん　急ぎ引きずり出して
急ちけれ出ち　いかせなさい
やらす

供の言

一　をかんちゆめやへて　かしこまりました
やあ〳〵思子　やあやあ若君を
とくかいしやるやから　おとし入れたやから
供や下部の　供や下部の
口しふて饉に　口をしぼり饉に
及ハちやる報ひ　およぼした報い
さあ〳〵　さあさあ
今日と思しよら　今日こそ思い知る
急ち出れ　急ぎ出ていけ
まゝ親の言
一　やあ〳〵　やあやあ
肝ふれてをとて　気が狂れていて
なまの事てやひもの　今のような事をしでかした
たんて此度や　どうかこのたびの事は
ゆるちたふうれ　おゆるし下さい
供の言
一　いやいらぬ　イヤいらぬ
いひはんやあらぬ　いい（以下　？）

急ち立ていやむはひ　急ぎ立ていや否か
若按司言
一　やあ供のきや　やあ供のもの
主人なまの事いふな　主人に今のような事をいうな
いそち立ちのけよ　急ぎ立ち退け
やあ父親よ　やあ父上よ
母親や時の迷ひ事　母上は一時の迷い事
あやまちとやよる　あやまちである
またわぬも　また私も
本腹よしやれハ　全快をしたので
慈悲よこのたひや　ご慈悲でこのたびは
ゆるちたぶうれ　おゆるし下さい
按司言
一　いやならぬ〳〵　イヤできぬできぬ
あのやうなやから　あのようなやつは
こまおちやすまぬ　ここにおいてはよくない
やあ供のきや　やあ供の者
急ちけれ出す　急ぎ連れ出せ

若按司言
一　あの母に素立られ　あの母上に育てられ
二八なてをれハ　十六歳になっておれば
直母の恩よりも　生みの母の恩よりも
まさて忘らぬあもの　まさって忘れられないから
慈悲よ此度や　ご慈悲で今回は
ゆるちたふうれ　おゆるし下さい
武富の子言
一　やあ按司かなし　やあ按司加那志
若按司のめしやいる事　若按司のおっしゃるように
時の迷ひ事　一時の迷い事で
あやまちとやれは　あやまちであったので
ご勘忍めしやうれ　ご勘忍下さい
また御次男の　またご次男の
御為ならぬ筋やれハ　おためにならぬ事である
ので
ひらに御ゆるしよ　なにとぞおゆるし
めしやうれ　下さいませ

---

按司言
一　やあ武富の子　やあ武富の子
鶴千代と二人か　鶴千代と二人が
なまのこといふらハ　今のように言うならば
此度やゆるさ　今回はゆるそう
やあ真なへ樽　やあ真鍋樽
この跡やよふ　今後はよく
肝こゝろむて　やさしい心を持て
まゝ親の言
一　おふ　一礼
按司言
一　やあ武富の子　やあ武富の子
御心実に鶴千代や　真心により鶴千代は
本腹よやれハ　全快したので
親のふくらしやや　親のうれしさは
いちやつくさらぬ　いい尽すことができない
此御恩とふとさや　このご恩は
身にあまてをもの　深く感謝しているので

万事いか事や　すべてよき様に
御礼御返事　お礼お返事を
おんみゆけてくいれよ　申しあげてくれよ

武富の子言
一　をかんちゆめやへて　かしこまりました

按司言
一　やあ鶴千代よ　やあ鶴千代よ
けふからや保栄茂の　今日からは保栄茂の
世つきたちやひ　世継ぎになり
あの御恩忘るなよ　あのご恩を忘れるな
孝の道つくす　孝の道を尽せ

若按司言
一　をかんちゆめやへて.　かしこまりました

按司言
一　やあ真なへ樽　やあ真鍋樽
とふ〳〵　さあさあ
中直り祝　中直りのお祝いに
のはねしめて見しれ　踊りをさせてご覧ぜよ

若按司言
一　やあ母親よ　やあ母上よ
けふのふこらしやに　今日のうれしさに
わぬ躍て戻やへら　私も踊って戻りましょう

按司言
一　あゝ出来た〳〵　ああ　てかしたでかした
とふ躍て戻れ〳〵　さあ踊って戻れ戻りなさい

歌十七たふぶし
一　けふのふこらしや　今日のうれしさは
なをにきやな立　何にたとえよう
苔てをる花の　苔める花が
露きやたこと　露を受けて花開いたようだ

武富の子言
一　やあ〳〵　やあやあ
をなちやらの前よ　おくさまよ
若按司よ　若君を
御供からめきやひ　お供いたして
戻てきやへたん　戻ってまいりました

をなちやら言

一　若按司もつれて　若君もつれて
　戻てちやめ　戻って来たか

若按司言

一　なまとむとて　ただいま戻って
　きやへたる　まいりました

武富の子言

一　御使のやう　お使いのように
　おんみゆけやへたん　申しあげました
　御心実に若按司や　まことに若君は
　本腹よやれハ　全快であるので
　親のふこらしやや　親のうれしさは
　いちや尽さらぬ　いい尽せない
　なまの事やれは　今のようであれば
　急ち世つき　急ぎ世継ぎを
　立めしやうれ　お立て下さい
　此御恩たうとさや　このご恩尊さは
　身にあまてをもの　深く感謝している
　万事いか事や　すべてよきように

---

御礼みゆけれてやりの　お礼申しあげよとの
　御返事たやへる　お返事でございます

をなちやら言

一　うのはづとやよる　その筈である
　やあ若按司よ　ねえ若君よ
　誠あるものと　誠ある者を
　神や見まふよる　神は見守るものである
　やあ〳〵なし子　ねえ娘よ
　けふのよかる日に　今日の吉き日に
　世つき祝また　世継ぎを祝いまた
　ね引さんしゆもの　結婚式をするから
　やあ武富の子　ねえ武富の子
　急ち御祝ひ　急ぎお祝いを
　はしめれよ　はじめてくれ

武富の子言

一　をかんちゆめやへて　かしこまりました
　歌ちやんなふし

一　生らぬ先の　生れぬ先の
　契りある中の　契りある中の

二人か行末衛や　　二人の行末は
百年ちやうハれ　　いついつまでもましませ
をなちやな言
一　やあ〳〵まつよまて　　やあやあ　まずは待て
やあ若按司よ　　やあ若君よ
けふやふこらしやの　　今日はうれしく
かにもまたあるい　　かくもまたあるか
たふ〳〵おし列て　　さあさあつれだって
躍て遊は　　踊って遊ぼう
若按司言
一　とふ〳〵押列て　　さあさあつれだって
躍て遊ひやへら　　踊って遊びましょう
歌しゆらいふし
一　けふのよかる日に　　今日の吉き日に
むすふ糸縁や　　結ぶ糸縁は
百年いつまても　　いついつまでも
むたへさかへ　　栄えあれ

# 「とみぐすく」の地名について

豊見城村史編纂室長
宜保喜久

「豊見城」の地名（人名）について、石碑文や辞令書などの文献資料を中心に検討をしてみた。その結論を先に述べると、次の二点にしぼることができる。

第一点は、四七〇年前に仮名がきで「とよミくすく」と呼び、以後は漢字で「豊御（美）城」と表記していたことが確認できる。

第二点は、とよミくすく・きまより（地名）、大やくもい（職名）、もうし、思符多など個人名は、毛氏豊見城家譜に該当者と思われる人物が確認される。

次は、引用した資料を年代順に並べた。その資料内容の概説を注記①～④として文末に掲載したので参考にされたい。

注1 真玉湊碑文―一五二二年建立
注2 辞令書（脇地頭）―一五六〇年発行
注3 浦添城の前の碑文―一五九七年建立
注4 ようとれのひのもん（表）・極楽山之碑―一六二〇年建立

以上四つの資料は、琉球王府が中山世鑑・中山世譜・琉球国由来記・琉球国旧記・球陽などの編集をまだ行なっていない時期、言いかえれば王府史（誌）などの歴史記録がない時代の公式記録である。

豊見城の原形は、もともと仮名がきで「とよミくすく」であり、後に豊御城、又は豊美城と漢字を当てた、と推測される。

この「とよミ」「豊御（美）」とは何を意味する単語なのか。古事記や万葉集に「響動・むー鳴り響く、名高い」として用例があり、また漢字では「豊御酒―古事記・酒の美称」また後拾遺集に「豊御幣―進物や礼物の総称」と使われた国語である。

一方、「くすく」と仮名表記されているが一般に濁音は書かないので「ぐすく」と読んでいた可能性がある。このぐすくに「城」の漢字を当てていることについては、現在のところ定説はない。一部に朝鮮語の城との関連を指摘する研究者もいるが、少数派であるようだ。

くすくの性格についても①防御説―城砦②集落説―住居あと③聖域説―拝所のある所―などがある。また考古学、民俗学、歴史学などそれぞれ専門分野の立場からも主張の強弱がある。

そこで「とよミぐすく」についてみると、その三つ

の条件を具備しているため、ぐすくという呼称はゆるぎないものとなる。

防御説については、十四世紀末に第二代山南王となる汪応祖の築城である、といわれる堅固な城砦である。聖域説についても、雨乞いの祭祀を行う場所、爬龍舟の神事を行っていた場所であり、殊に有名であったと考えられる。

とよミぐすくに関する限り、防御説と後世の聖域説が強烈である反面、集落説は最も説得力が弱いように思われる。沖縄県内には、ぐすくと名のつく地名や場所が三百ヵ所以上もあるが、とみぐすくは首里城、中城城、座喜味城、今帰仁城などに次ぐネームバリューがあったのだろう。

**(注1) 真珠湊碑文** 一五二二年（嘉靖元年・尚真四六年）に首里城・識名・国場・真玉橋・石火矢橋・小禄・那覇港（ヤラザ森城）に至る真玉道の完成と、真玉橋の架橋を記念して建てられた仮名書きの石碑である。首里城歓会門外に建てられたので「石門の西のひもん」とも呼ばれている。

その文中に「…又とよミくすく此くすくとミつのかくこのため…」と地名だけがある。現代文にすると「…又、豊見城とその地域（此くすく）と、水の格護（治水）のため…」と理解される。

**(注2) 辞令書**（田名家文書・県立博物館蔵）は、嘉靖三十九年（一五六〇年）脇地頭（一村を采地とする）へ発給されたもの。

「とよミくすく、まきょりの　大ミねのさとぬしところ、にしのこおりの一人せそこの大やくもいに　たまわり……」とある。

現在の那覇市小禄の大嶺部落がまだ豊見城間切であった時代の辞令書（写）である。この時期までは、ひら仮名書きの辞令書が多いが、一六〇九年（薩摩の琉球打ち入り）以降は漢字書きが一般的な書式になるのも興味深い。

**(注3) 浦添城の前の碑文** 一五九七年（萬暦二十五年・尚寧九年）に、浦添から首里に至る太平橋や平良橋の架橋と、敷石道の完成を記念して建てられたことが、碑文の内容からわかる。

表側は仮名書きになっていて、その末尾に当時の大臣「世あすたへ三人」の名前が刻まれている。その一人が「とよみ城の大やくもいもうし」とある。裏側には漢字で「豊御城真牛金」となっている。

この人名は、もちろん同一人物であると考えられるが、どういう人物なのか。毛氏家譜の中

から該当者を調べてみた。

もうし、真牛金は、毛氏豊見城家四世・世章（豊見城親方・総地頭）の童名であること、萬暦十一年（一五八三年）に法司官（世あすたへ）に任命され、同三十一年（一六〇三年）に死亡していることが見える。

**（注4）ようとれのひのもん（表）・極楽山之碑文（裏）**

一六二〇年（萬暦四十八年・尚寧二十三年）に浦添ようどれ（第一尚氏王家の墓所）を改修した時の碑文である。表側の仮名書きには「世あすたへ三人」のうちの一人が「とよミくすくの大やくもい」として職名だけを記載している。その裏側の漢字極楽山之碑では「豊美城思符多」と個人名がわかる。

毛氏家譜によると、五世・盛続（豊見城親方・総地頭）の童名が「思武太」である。符（ふ）と武（ふ・む）の一字は違うが、萬暦四十二年（一六一四年）に法司官に任命されている。同時代に豊見城を名乗る三司官家は毛氏豊見城家であるから、石碑に刻まれた人物名も盛続・豊見城親方であると特定してよいと思われる。

〔参考文献〕沖縄県文化財調査報告書第六十九集　全石文（沖縄県教育委員会）浦添市史第二巻資料編1（浦添市史編集委員会）
毛氏家譜（豊見城家所蔵）
沖縄大百科辞典（沖縄タイムス社）

（注2）辞令書　県立博物館所蔵（田名家文書）

# 豊見城村史編纂室業務日誌

平成七年九月 ～ 平成八年十月

| | |
|---|---|
| 9・28 | 儀間盛昭氏（字伊良波）より「水筒」1点、「水筒で造った漁業ランプ」1点寄贈。 |
| 9・29 | 資料収集（字座安・渡橋名）。赤嶺秀義氏（字座安）より「ミージョーキー」1点、「サギジョーキー」1点、「ドル紙幣」4点、「ドル貨幣」11点、「ベトナムで使用された米軍軍票」16点、「百円硬貨（昭和33年発行）」1点、「ベトナム貨幣」1点の寄贈。 |
| 10・2 | 赤嶺喜一郎氏（字渡橋名）より「米軍払下げウジン」3点、「米軍ヘルメット」1点寄贈。 |
| 10・3 | 高安清繁氏（字翁長）より「親子ラジオ」「ランプ」「トーフウーシ」各1点の寄贈。 |
| 10・4 | 沖縄県地域史協議会研修会参加（於・石垣市、大城達宏・儀間淳一、～6日まで） |
| 10・7 | 第4回自分史づくり講座（村社会福祉センター）。 |
| 10・9 | 課内会議（平和事業について）。「平和都市へ　市民の足どり（那覇市）」展示会視察（大城・上地）。 |
| | 當間良晴氏（字保栄茂）より「ワクラカマド」「ミージョーキー」「バーキ」「ランプ」「鉦鼓」各1点および「セーマー」2点「古写真」4点の借用。當銘美津氏（字保栄茂）より「アンダガーミ」「まな板」の借用。 |
| 10・12 | 大城善八氏（字平良）より「ワーヌトーニー」「米軍製弾薬箱」「農薬噴霧器」各1点寄贈。佐久本盛光氏（字平良）より「鍬類」6点、「オーダー」2点、「タライ」1点の寄贈。 |
| 10・13 | 資料収集（字上田）。大城親一氏（字上田）より「薬莢で造った鍋」「グラマンの機体で造った鍋」各1点の借用。赤嶺成輝氏（字渡嘉敷）より「パスポート」1点、「賞状類」4点の借用。大城菊氏（字高嶺）より「枡（マス）類」3点、「高嶺販売店の印鑑」1点、「古写真」6点の借用。 |
| 10・16 | 資料収集（字上田）。大城盛次郎氏（字上田）より古写真借用。宜保成吉氏（字上田）より「軍払い下げのムラ芝居衣装」借用。當銘昌徳氏（字渡橋名）より「軍服類」5点、「野戦毛布の仕立て直し子供服」1点「ハガマ」1点、「古写真」2点の借用。資料収集（字金良）。赤嶺永市氏（字渡橋名）より「ランプ」1 |

| | |
|---|---|
| | 点、「アンダガーミ」1点の借用。高安盛登氏（字翁長）より「日本軍軍装品」9点、「米軍水筒」1点の借用。 |
| 10・17 | 資料収集（字長堂）。大城清四郎氏（字長堂）より「殺虫剤器アース」1点の寄贈および「アジマー枕」1点を借用。　大城良子氏（字上田）より「古写真」9点借用および「五つ玉そろばん」1点の借用。宜保成吉氏（字上田）より「古写真」4点借用。 |
| 10・18 | 「読谷村平和創造展」「終戦五〇周年平和展（浦添市）」視察（達宏・みゆき・儀間）。大城公一郎氏（字長堂）より「タカウジン」1点、「一銭玉（大正年代）」5点の寄贈。 |
| 10・21 | 第5回自分史づくり講座（村社会福祉センター） |
| 10・23 | 資料収集（字饒波）。高安亀平氏（字翁長）より戦時国債、公営バス証明書等9点借用する。同氏宅に脱穀機、竿秤、クルマボウが保存されていることを確認。借用承諾をお願いする。金城栄毅氏（字饒波）より「ランプ」1点「米軍払下げの衣装箱」1点の寄贈および「古写真」1点を借用。金城栄昌氏（字饒波）より「鉦鼓」1点の借用。赤嶺ヨシ子氏（字嘉数）より「飯盆」1点、「つるべ」1点、「クェーウーキ」2点を借用。大城菊氏（字高嶺）より「着物」1点の借用。 |
| 10・24 | 資料収集（字饒波）。長嶺保弘氏宅より同字での組踊りの古写真および「火鉢」1点借用する。赤嶺喜皓氏（字嘉数）より古写真（アルバム）借用。県立平和資料館、ひめゆり資料館（借用資料返却のため）。金城栄利氏（字饒波）より古写真6点借用。嘉数自治会より「銅鑼」1点借用。 |
| 10・25 | 資料収集（字饒波・嘉数）。赤嶺喜之助氏（字嘉数）より古写真借用する。大城長吉氏（字饒波）より古写真8点借用する。 |
| 10・26 | 資料収集（字高安）。大城英男氏（字翁長）より古写真、「ウミフージョー」借用。宜保徳次氏（字高安）より「サギジョーキ」1点、「チャワンバーキ」1点、「スンカンマカイ」4点、「サキチブ」12点、「マカイ」1点借用する。 |
| 10・27 | 資料収集（字高安）。外間敏雄氏（字高安）より「トーフウーキ」1点借用。 |

| | |
|---|---|
| 10・28 | 第6回自分史づくり講座（村社会福祉センター）。 |
| 10・30 | 字渡嘉敷旧集荷場より園芸協同組合時代の資料借用する。（大型の竿秤2本、放送用アンプ、園協で使用したスタンプ印鑑等）。村立座安小学校より写真（9点）借用する。座安亀吉氏（字高安）より「軍雇用員時代の運転免許証」1点借用。 |
| 10・31 | 金城良光氏（字真玉橋）より「五〇銭貨（戦前）」二四九枚借用および「戦前の着物」「アンダナービ」各1点の寄贈。 |
| 11・2 | 大城キヨ氏（字金良）より「百円紙幣（戦前）」借用する。 |
| 11・9 | 高安亀平氏（字翁長）より「脱穀機」、「クルマボウ」借用する。 |
| 11・10 | 宮里真彰氏（字渡嘉敷）より「USのこぎり」2点、「米軍払下げ水筒」1点、「ジュラルミン製蒸し器」1点、「もち蒸し器」1点、「寒天づくり器」1点、「魔法瓶」1点、「洗濯板」1点、「砥石」1点合計9点を借用。當銘光一氏（字翁長）より「翁長鍬」1点、「ハガマ」1点借用する。 |
| 11・11 | 第7回自分史づくり講座（村社会福祉センター）。 |
| 11・13 | 大城盛次郎氏（字上田）より「鋤（スキ）」、「マーガ」、「運搬用トロッコの車輪」各1点を借用する。平田永佶氏（字高安）より「豆腐箱」2点、「木綿布」1点借用する。大城武彦氏（字伊良波）より「鋤」「マーガ」各1点の寄贈。 |
| 11・14 | 大城正喜氏（字伊良波）「馬鍬（マーガ）」1点借用。赤嶺喜一郎氏（字渡橋名）より「戦果の鍋」1点借用。座安亀吉氏（字高安）より「火鉢」1点借用。 |
| 11・16 | 「とみぐすく写真・生活資料展」（於・村立中央公民館　～18日まで）。中村安子氏（字饒波）より「広口硝子瓶」「斤ビン」「ススキのほうき」各1点の借用。 |
| 11・17 | 高安清純氏（字翁長）より「2銭銅貨」「百円札」の寄贈。 |
| | 「世界のトミグスクンチュ歓迎会」（於・村農協ホール） |
| 11・18 | 第8回自分史づくり講座（村立社会福祉センター） |

| | |
|---|---|
| 11・19 | 「第一、第二豊見城国民学校卒業式」（於・村立中央公民館）。「写真・生活資料展」後片付け。 |
| 11・20 | 与那原町綱引き会館（資料展借用物品返却のため）。 |
| 11・21 | 読谷村歴史民俗資料館、沖縄市郷土博物館（資料展借用物品返却のため）。 |
| 11・25 | 第9回自分史づくり講座（村社会福祉センター）。 |
| 12・4 | 首里・豊見城家へ「村史だより創刊号」届ける。（室長、達宏） |
| 12・12 | 第10回自分史づくり講座（村立中央公民館）。 |
| 12・19 | 第11回自分史づくり講座（村社会福祉センター、中間報告会）。 |
| 12・21 | 字渡嘉敷より資料展に出品した「秤り類」3点を村へ寄贈する旨の連絡あり。 |
| 12・26 | 田港朝和専門部員来室。 |
| 12・28 | 村役所御用納め。 |
| 平成8年 | |
| 1・4 | 村役所御用始め。 |
| 1・5 | 読谷村史・泉川係長来室。 |
| 1・8 | 課内会議（予算について）。 |
| 1・9 | 日本フライングサービス（株）、サン・スタジオ（航空写真撮影見積もり依頼）。 |
| 1・11 | 糸満市史（沖縄戦聞き取り調査の件で伺う・達宏、儀間）。 |
| 1・12 | 佐敷町史（沖縄戦聞き取り調査の件で伺う・達宏、儀間）。 |
| 1・19 | 豊寿大学にて講演（『村史だより』および村内の歴史について～講師・宜保室長）。 |
| 1・20 | 第12回自分史づくり講座（村社会福祉センター）。 |
| 1・22 | 前村史編集委員・赤嶺成政氏より資料を戴く。南島文化研究所（室長、みゆき）。 |
| 1・27 | 第13回自分史づくり講座（村社会福祉センター）。 |
| 2・1 | 宜保喜久室長、村立中央図書館館長に就任。村老連会長会（戦争体験談聞き取り調査の協力について）。 |

| | |
|---|---|
| 2・3 | 第14回自分史づくり講座（社会福祉センター）。 |
| 2・6 | 地域史協議会視察「米軍キャンプ・キンザー内沖縄戦博物館（浦添市）」「陸上自衛隊第1混成団内戦史資料室（那覇市）」（達宏、みゆき、儀間）。 |
| 2・9 | 沖縄県地域史協議会研修会（名護市）『展示戦後五〇年』をテーマに報告発表（達宏、みゆき、儀間）。 |
| 2・16 | 日本フライングサービス（株）航空写真撮影業務委託契約。 |
| 2・17 | 第15回自分史づくり講座（村社会福祉センター）。 |
| 2・21 | 臨時職員・長嶺愛子採用。 |
| 2・23 | 戦争体験聞き取り調査事前研修（村史編さん室・一般公募調査員3人・室長、達宏、儀間）。 |
| 2・24 | 第16回自分史づくり講座（村社会福祉センター）。 |
| 2・28 | 臨時職員・上地晴美退職。 |
| 2・29 | 村史専門部会（村史編さん室）。 |
| 3・6 | 県立公文書館（當間一郎専門部員事務連絡・達宏、みゆき）。 |
| 3・9 | 村立中央図書館開館式（午後2時～）。 |
| 3・12 | 航空写真撮影委託業務・写真、ポジ、納品受け取り。 |
| 3・16 | 第17回自分史づくり講座（村社会福祉センター）。 |
| 3・22 | 村史編さん室事務所移転（建設部構内→村立中央図書館1階へ）。 |
| 3・23 | 第18回自分史づくり講座（村社会福祉センター） |
| 3・29 | 嘱託員・大城みゆき退職（西原町史へ） |
| 3・31 | 平成七年度自分史づくり講座修了式（村社会福祉センター）。 |
| 4・1 | 定期人事異動により吉永安三係長社会年金課より村史へ着任。嘱託員・儀間淳一採用。 |
| 4・5 | 南島文化研究所へ（室長、儀間）。 |
| 4・8 | 『豊見城村史』復刻版　村役所倉庫より中央図書館へ移す。　課内会議。 |

| | |
|---|---|
| 4・15 | 田港専門部員来室。 |
| 4・26 | 「お墓シンポジウム」（沖縄県青年会館） |
| 4・30 | 古写真収集（豊見城、宜保、上田）。 |
| 5・1 | 村老連会長会（戦争聞き取り調査の説明）。字上田『三月水撫り』視察。 |
| 5・9 | 「文献編」専門部会。（於・村立中央図書館） |
| 5・10 | 南島文化研究所、琉球大学（金城正篤専門部長）、阿波根直孝専門部員へ事務連絡。（阿波根氏より字嘉数、赤嶺家の墓誌拓本借用する。・儀間）。 |
| 5・21 | 平成8年度自分史づくり講座講師依頼（琉球新報社・中村喬次氏）。 |
| 5・23 | 県立図書館（文献編に使用したい写真資料等の確認）。南島文化研究所。 |
| 5・27 | 民生委員へ戦争体験聞き取り調査の依頼および説明会（社会福祉センター） |
| 5・31 | 沖縄県地域史協議会総会（佐敷町シュガーホール・室長、吉永、達宏、儀間）。 |
| 6・6 | 南島文化研究所（豊見城村関係写真等の確認）。 |
| 6・7 | 琉球新報社・中村喬次氏へ平成8年度自分史づくり講座の講師正式依頼（文書届ける）。 |
| 6・14 | 平成8年度自分史づくり講座開講式（村立中央図書館1階集会室・嘉数村長、垣花教育長参席）。 |
| 6・20 | 戦争体験談聞き取り調査の件で説明会（村社会福祉センター・民生委員対象）。 |
| 6・21 | 宜野座村立博物館（沖縄戦直後の豊見城村出身者と思われる墓標の撮影・達宏、儀間、与那嶺）。 |
| 6・28 | 第2回自分史づくり講座（中央図書館）。戦争体験聞き取り調査員（一般公募者）説明会（於中央図書館） |
| 7・1 | 沖縄時事出版、農連市場（豊見城村関連写真の確認・吉永、儀間）。 |
| 7・5 | 第3回自分史づくり講座（中央図書館1階集会室）。 |
| 7・11 | 金武町史（屋嘉、中川収容所跡視察および事務調整・自分史づくり講座視察の件で。達宏、儀間）。 |
| 7・12 | 名護市史（羽地、田井等、久志収容所跡視察および事務調整）。宜野座村史（旧古知屋収容所跡視察および事務調整）※自分史づくり講座視察の件で。吉永係長、達宏 |

| | |
|---|---|
| 7・19 | 第4回自分史づくり講座視察（戦後の出発点『収容所跡』を訪ねて）名護市（羽地、田井等、瀬嵩収容所跡）宜野座村（古知屋収容所跡、村立博物館）金武町（屋嘉収容所跡）。 |
| 7・24 | 西原町史出版祝賀会（室長、儀間）。 |
| 7・27 | とみぐすく祭り（瀬長島・～28日まで）。 |
| 7・31 | 村史第9巻『文献編』専門部会（中央図書館1階集会室） |
| 8・2 | 第5回自分史づくり講座（中央図書館1階集会室）。旧真玉橋石橋撮影（改修工事に伴う発掘調査で出土） |
| 8・5 | 県立図書館（同館所蔵資料の写真撮影およびマイクロフィルムの借用・達宏、儀間）。 |
| 8・6 | 県立図書館（借用申請書の提出）。 |
| 8・7 | 金城茂氏（那覇市前島）より山部隊歩兵第二二連隊名簿を借用複写する（達宏、儀間）。 |
| 8・8 | 翁長「サーターヤーヌヒラ」の石畳写真撮影（村道拡張工事の際、埋没分出現）。 |
| 8・14 | 県立図書館（借用資料「マイクロフィルム」の返却） |
| 8・16 | 第6回自分史づくり講座（中央図書館1階集会室）。 |
| 8・30 | 第7回自分史づくり講座（中央図書館1階集会室）。 |
| 9・8 | 県民投票 |
| 9・10 | 村福祉課援護担当より油甕（アンダガーミ）引き取る。（保栄茂土地改良造成地区内の壕より）。 |
| 9・13 | 第8回自分史づくり講座（中央図書館1階集会室）。 |
| 9・17 | 平川成次郎氏（字瀬長）より「サバニ」1艘「ウェーク」1点の寄贈（社会教育課文化係で引き取り保存） |
| 9・18 | 沖縄大学・田里修専門部員の研究室へ（事務連絡、儀間）。 |
| 9・24 | 南島文化研究所（『里積記』『一件帳』を複写・田里専門部員の引用資料として。儀間） |
| 9・27 | 第9回自分史づくり講座（中央図書館1階集会室）。 |
| 10・2 | 沖縄県地域史協議会研修会（於・宮古上野村　～4日まで。儀間淳一参加） |
| 10・3 | 當銘保一氏（字保栄茂）より戦争体験談原稿複写借用する。 |

| | |
|---|---|
| 10・6 | 字根差部の印部土手石の拓本取り。（阿波根直孝氏、儀間） |
| 10・8 | 那覇市文化局歴史資料室・田名真之氏（原稿受領）。 |
| 10・11 | 第10回自分史づくり講座（中央図書館1階集会室）。 |
| 10・19 | 村立上田小学校創立50周年記念式典。 |
| 10・25 | 第11回自分史づくり講座（中央図書館1階集会室）。 |

## 編集後記

◆ 豊見城村史だより（第二号）は、村立中央図書館の開館記念講座の資料（テキスト）づくりを引き受けました。何分にも、本村で四回シリーズの歴史講座を開設するのは、恥ずかしながら、初めてであります。

◆ 生田先生と當間先生の講座内容は、豊見城村史資料としても非常に貴重なものであり、多くの村民と共に受講できることを感謝します。

◆ 「とみぐすく」の地名について、少しこだわりをもって調べました。少なくとも四百年以前から平仮名で「とよミくすく」であったことは確認できました。

（宜　保）


**豊見城村史だより　第2号**

発　行　平成8年（1996）11月20日

編　集　豊見城村教育委員会　村史編纂室

901-02　豊見城村字伊良波392番地
村立中央図書館内

電話（098）856－3671
FAX（098）856－8044

印刷・とみしろ印刷



村史編纂室スタッフ

| | |
|---|---|
| 宜保喜久 | 室長 |
| 吉永安三 | 係長 |
| 大城達宏 | 主査 |
| 儀間淳一 | 嘱託 |
| 長嶺愛子 | 臨任 |